

---

# 発達理論の学び舎

Back Number: Vol 58

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」

---



---

## 目次

- 1141. 内からの叫び
- 1142. 『成人発達理論による能力の成長』の五章における主題の断片
- 1143. 知識と経験の血肉化に向けた三つの方策
- 1144. 語り続ける夢:深層的な知識体系の構築
- 1145. 睡眠中の意識の中で進行するものと切断されぬ鎖
- 1146. 「リズム(地下茎)」と認識の枠組みのベクトル転換
- 1147. 作曲実践の進展
- 1148. ヘラクレイトスと自己との闘争
- 1149. 心理統計学に関する言語体系
- 1150. 最終試験へ向けて
- 1151. 発達測定に関するメモ
- 1152. 『成人発達理論による能力の成長』の主題の断片:既存の経済原理に立脚した種々の未成熟な発想からの脱却
- 1153. リフレクションの本質:「無間地獄に続く道」
- 1154. 終末の日
- 1155. オランダの大学院と米国の大学院
- 1156. 植物の根のように
- 1157. 爽快かつ鈍重な朝
- 1158. 自己意識の存在しない世界の中で
- 1159. 80年続く内側の中心主題
- 1160. これから生まれる自分と仕事の社会性

---

## 1141. 内からの叫び

自分の内側の奥底から何かを叫びたいような気持ちに襲われることが日常度々ある。それは、物理的な身体を用いて叫びを発するのではなく、精神的な身体が発するようなより強烈な叫びである。言い換えると、それは自分の存在が張り裂けるような音だと言っていいかもしれない。私は、自己の存在がはち切れる際に鳴り響く音のようなものを先ほど聞いた。

今の私は、少しばかり途方に暮れている。毎日、文字通り毎日、自分の内側から回答に窮する問いが自分に向けて投げかけられる。それは回答に窮するというよりも、回答が不可能に思えるような問いばかりであり、そして、それらの問いに対して自分が何から着手し、どのようにそれらの問いと向き合っていけばいいのかがわからないような状態なのだ。

哲学的な素養もなく、哲学的な訓練を一切受けていないことが、今の私を大いに悩ませる。目の前に積み上げられる哲学的な問いの一つ一つにどのように向き合っていけばいいのだろうか。どのようにそれらの問いに取り組んでいけばいいのだろうか。

一切の手掛かりもなく、状況は混迷を極める。それらの問いは、ひどく個人的な問題とひどく社会的な問題が複雑に絡み合っている。ある問題は個人的なものであり、別の問題は社会的なものである、というものではないのだ。そうではなく、全ての問題が等しく個人的であり社会的なものであることが、それらの問いへの回答をさらに難しくさせる。

目の前の視界が遮られてしまうほどの問いの壁を前にした時、そこで救いの手段を求めたのは、過去の偉人が書き残した哲学書であった。しかも、それらは純粹に形而上学的なものではなく、社会の具体的な問題と密接に関わった哲学書である。それらの哲学書を貪るように読みたいという抑えがたい気持ち、いや、それらを読まなければ一步も身動きができないところにまで自分は追い込まれている。問いが問いを解決すること以上に、問いが問いを呼び込み、難問が自分の目の前に、日毎に高く積み上がっていくのがわかる。

そうした状況が、私を哲学の方向に突き動かす。以前の日記で書いたように、哲学というものが、これほどまでに個人的かつ社会的、実存的かつ実践的なものだということに気づいたのは、欧州での生活を始めてからだだった。

---

書齋の本棚に手つかずの哲学書は、この日のためにそこにあったのだと思わずにはいられない。この夏、私は読める限りの哲学書を読み、今の私の目の前に積み上がった問いとどのように向き合えばいいのかの方法を明確にし、それらの問いに答えようとする形で日々を過ごしたいと思う。とにかく、今の自分が直面する種々の問題に無配慮に立ち向かっていくのではなく、それらの問いへの向き合い方に関する方法論の確立を真っ先に行っていく必要があるだろう。2017/6/6

#### 1142.『成人発達理論による能力の成長』の五章における主題の断片

夕食を食べながら、食卓越しに見える窓に向かって独り言をブツブツとつぶやいていた。それはつぶやきというよりも、誰かに訴えかけるような、そして、自分自身に訴えかけるような言葉の連なりだった。

夕食時に私が何かを訴えようとしていたのは、第二弾の書籍『成人発達理論による能力の成長』に関する主題についてである。これまでの日記の中で、この作品全体を貫く主題と序章と第一章に関する主題に触れていたように思う。先ほどは、第五章の主題に関わるような内容を一人であれこれとつぶやいていた。第五章の中でも、とりわけ「内省(リフレクション)」の実践について思うことがあった。

内省実践そのものに対して、そして内省の核となる「概念化」と呼ばれる、自己の経験や知識に自分の言葉を与える実践に対して思うことがあった。内省や概念化の実践に終わりなどないことは明白であるが、それをどの次元まで推し進めるべきかに関しては、一つの到達地点のようなものがあるように思う。

内省の実践というのはそもそも、感想を述べることや内側の基準を単純に外側に表明するようなことではないことは本書の中でも指摘している。内省というのは、健全な自己批判の眼を持ちながら、自己の経験や知識を再解釈することであり、再解釈を通じて新たな意味づけを行っていくことである。

本書では言及していなかったが、結局、そうした内省をどこまで推し進めていくべきかという、自己の意味構築装置が立脚している存在の基底まで深く行うべきである。つまり、内省を通じて、自らが構築する意味が、どのような意味構築装置によって生み出されているのかを把握するだけでは不

---

十分なのだ。それを超えて、自らの意味構築装置そのものが何を基盤として生み出されているのかを掴むところまで内省を推し進めていかなければならない。より端的には、自らの意味構築装置が、私たちを取り巻く組織や社会のどのような思想的枠組みや制度的な仕組みに立脚しているのかを把握するところまで内省を進めていかなければならない。

さもなければ、私たちは結局のところ、自分が置かれた組織や社会の特殊なルールに無自覚なまま、個人的なたわいもない擬似的な内省実践を永遠にすることになってしまうだろう。本書では明示的に書くことをしなかったが、真の内省実践は、自らの内側の声を獲得することのみならず、その声を通じて、自己の存在そのものを呪縛する集合的な思想や仕組みに自覚的になるところまで到達しなければならないように思うのだ。

仮に、内省を通じて他の専門領域の人たちと協働作業をすることを意図するのであれば、自分の専門領域の基底に到達するまで内省実践をしなければならない。さもなければ、自らの専門性がどのような思考の枠組みに立脚しているのか、そして、立脚する構造が抱える盲点や限界が何なのかに永遠に気づくことができないだろう。さらに、自らの専門領域の基底に到達しないまま、他の専門領域に越境していくことは、根の無い浮き草の移動に過ぎない。そのような状況では、決して他の領域の専門家との真の対話など実現せず、自らの専門性を意味のある形で発揮することなどできないだろう。

強靱な思考を持っている専門家というのは、やはり自己の専門領域の基底に到達しているがゆえに、腹から声を発することができるのだ。また、錨が専門領域の基底に降ろされていれば、何のためらいもなく多様な領域に乗り出していくことが可能なのだと思う。それこそが、真の内省実践を通過した、強靱な思考を持ちながら多様な領域を柔軟に越境できる専門家の特徴だろう。2017/6/6

#### 1143. 知識と経験の血肉化に向けた三つの方策

今朝の起床後、寝室から書斎に向かうために、寝室を一步離れた瞬間に、自らの学習方法を見直すための三つの方策が思い浮かんだ。これは直感的なものであり、起床直後の私がなぜそのようなことを思いついたのかは定かではない。とりあえず閃いたものについて書き留めておく。これまで幾度となく、知識と経験を文章の形にすることによって学びを深めていくことの重要性を指摘してい

---

たように思う。これはすなわち、書くことによって知識と経験を血肉化していくことを意味しており、それは“learning by writing”と呼べるだろう。

インドの聖者ラマナ・マハリシが内省的な文章を書き続けることによって悟りに至ったように、知識と経験を自らの言葉によってまとめ上げていくことは、特殊な学習効果を帯びている気がしてならない。また、過去の偉大な哲学者たちのあり方を見ていると、彼らは皆一様に、大量の文章を書く人間たちであった。

そして、二つ目に重要なのは、教育哲学者ジョン・デューイも述べているように、“learning by doing”という発想だ。これはデューイが指摘した「経験学習」と呼ばれるものであり、学習の本質はやはり自らの実践を通じて得られる経験の中にあるだろう。

三つ目に重要なことは、“learning by teaching”という発想だ。自分の知識と経験を他者に教えるという実践は、教えようとする内容の理解を間違いなく深めてくれる。この実践は、特に他者を通じた二人称的な実践であるがゆえに、書くこととはまた違った洞察を得ることができるだろう。

これら三つは、特に目新しいことではないのだが、今朝目覚めた時にそれら三つが一つの塊として自分の内側で姿を現したため、ここであえてそれら三つを列挙する形で書き留めておいた。大切なことは、それら三つのどれかを強調するのではなく、それら全ての相互作用を常に念頭に置き、それら三つを一つの総体的な実践として取り組んでいくことだろう。

自らの身体と精神を通じて得られる経験を自分の言葉として文章にまとめ、それらを他者に教える形で共有していくこと。それらは知識と経験の血肉化に不可欠であり、それらのサイクルを通じて、新たな知識と経験が再度内側に流入してくることが起こるだろう。

寝室を離れ、書斎に向かっている最中の私はそのようなことを考えていた。今日は朝から雨模様だ。激しい雨が書斎の窓ガラスを打っている。風も少しばかり吹いており、今日は一日中、書斎の中で仕事をすることになるだろう。今日やるべきこととして、まずは「成人発達とキャリアディベロップメント」のコースの内容の全てを大雑把に振り返っておきたい。

---

コースの進行に合わせて、各クラスで取り上げられている論文を要約するということを常に行っていたため、それらの要約を参照しながら、各クラスの講義資料を見返しておきたい。それが終われば、第二弾の書籍『成人発達理論による能力の成長』に関する紹介記事を二つほど執筆しておきたい。これは自分用に書くのではなく、出版社に提出するものだ。記事の執筆が済めば、あとやるべきことは、明日の「タレントアセスメント」の最終回のクラスで行われるプレゼン資料を完成させることである。

ルーワーデンにあるホテルマネジメントスクールに対して、大学の入学審査の方法に関してデータ分析を元にした実証的な助言をするという課題について、その結果をその大学のアドミッション担当者に報告することが明日のクラスの内容だ。この発表はグループで取り組むことになっており、私たちのグループには五人のメンバーがいる。

当日の発表時間は短いため、最も早口で英語を話せるドイツ人のフランに当日の発表を任せ、私は五人の分析結果と推奨施策をプレゼン資料にまとめる役割を担うことにした。その資料作りが済めば、オンライン教育と教育哲学に関する気になる論文をいくつか読みたいと思う。2017/6/7

#### 1144. 語り続ける夢: 深層的な知識体系の構築

昨夜、この夏の休暇を活用して読もうと思う30本ほどの論文を、大学の電子ジャーナルを通じてダウンロードした。自分のパソコンにダウンロードした論文を大学の図書館で印刷するために、再度これらの論文を自分のメールアドレスに送った。それら30本の論文は、一見すると領域が多岐にわたっているが、自分の中には統一的なテーマがある。人間発達と教育というテーマを根幹に据え、それを中心に現在の私の関心の輪が広がっている。

論文を選定する際に、無数の論文の概略をざっと読み、印刷すべき論文の吟味を重ねていたためか、自分の内側に大量の知識が流れ込んでくる感覚が昨夜あった。当然ながら、それらをその場で完全に消化することなどできず、逆に、それらの大量の知識といかに自分が向き合っていくべきかの方策について考えを巡らせていた。

関心の輪が広がれば広がるほど、多様な領域の知識と向き合うことになるが、その時に、いかにそれらを自分が根幹として持つテーマに帰着させていくかが非常に大事になる。種々雑多な知識を

---

そのままの形で取り入れるのではなく、自らの根幹的なテーマと絶えず関連付けながら、それらの知識と向かい合っていく必要がある。昨夜の就寝前に、そうしたことを考えていた。同時に、就寝前の私は少しばかり焦燥感に駆られていたのも確かである。

現在の私が向き合わざるをえない多様な領域とそこで得られる多様な知識を、いかに統一的なテーマの中に包摂していくのかについて、そのようなことが自分にできるのだろうかという思いになっていた。次から次へと自分に向かってくる無数の知識が、私を圧倒していた。知識の大群に押し潰されるような感覚を持ちながら、私は眠りについた。早朝目覚めてみると、そうした重々しい感覚が消え去っており、自分の内側で何かが整理されていることに気づいた。

昨夜の夢の中で私は、獲得された知識を自分の内側に体系として構築するために、延々と何かを話し続けていた。これまで読んできた論文や専門書の内容、そしてこれから読むであろう論文や専門書の内容を先取りする形で、とにかく自分が向き合う知識の大群の一つ一つに言葉を当てることを行っていた。

夢の中で文章を書くかのように話し続けていた私は、一つ一つの知識に対する深い理解のみならず、それらの知識の関連性に気づき、そこからまた新たな気づきを得ることによって、再びそれについて話し続けるということを延々と行っていた。その過程の中で一切の疲労感はなく、文字を書くように話せば話すだけ、自分の内側に均衡がもたらされ、自分の精神空間が澄み渡っていくような確かな感覚があった。夢から覚めた直後、私はノートの端に「生成的な夢」「探究的な夢」「ユング的な夢」というキーワードを書き付けていた。

確かに、それは探究的な夢であり、一つの知識が他の知識を呼び込むという意味で生成的な夢だった。しかし、起床直後の私が何をもってして昨夜の夢を「ユング的な夢」と形容したのかは定かではない。昨夜の夢の中で話し続けていた最後の知識項目がユングに関するものだったようなおぼろげな記憶が脳裏をよぎる。

いずれにせよ、昨夜の夢は、混沌とした知識の大群を一つの統一体にまとめ上げ、自分の精神空間を整理するような夢であったことは間違いない。おそらく、こうした夢を継続的に見ることが、知識を深層的な次元で体系化していくことに必須なのだと思う。2017/6/18



今日は朝から雨が降り注ぐ一日だった。昼食後、いつものように仮眠を取っていると、このところ睡眠中の意識内で興味深いことが起こっていることに気づく。端的に述べると、睡眠中の意識の中で、私は自らの知識体系の整理と構築を同時に行っているようなのだ。午後の仮眠の最中も、覚醒意識と夢見意識の狭間で、午前中に内側に入ってきた知識の整理と、それを既存の知識体系の中に組み込んでいくという構築作業を同時に行っているようだった。

こうした作業過程において、いつも興味深いのは、そこで新たな言葉を自分が発見することである。より正確には、知識体系を整理し、新たな知識体系を構築する際に不可欠となる新たな言葉を自らが生み出しているようなのだ。これは私が私とと思っている存在が行っている作業ではなく、深層的な私の意識が自律的に行っている作業である。そのため、仮眠から覚めた瞬間に、仮眠中に自分が新たな言葉を獲得したことに気づけるのだが、それがすると覚醒中の自分の意識からこぼれ落ちてしまうことがある。

本日の仮眠中も間違いなく、既存の知識体系が整理され、新たな知識体系への一步を進めるための言葉が生成されていたのだが、それが何かを今の私は覚えていない。そうした様子を見るにつけ、知識体系の構築作業は、意識的なものであり、なおかつ無意識的なものだと言える。さらには、知識体系というのは自己の深層的な部分に息づくものなのだという点にも気づかされる。ここから思うに、浅薄さの漂う発言というのは、発話者の知識体系が自身の深層的な部分に根ざしていないことに一因があると言えるかもしれない。

仮眠を終えた私は、食卓に行き、午後からの仕事に備えてコーヒーを注ぎに行った。コーヒーの入ったポットに触れた瞬間、「仮に罪を科せられることなく、一人の人間をこの世界から葬り去ることができるのであれば誰を選ぶか？」という問いかけにぶつかった。

私はその問いに対して、「過去の自分である」と即答した。以前の日記に何度か書き留めているように、私の内側には絶えず、これまでの自分のあり方や発想の枠組みを痛烈に叱責しようとする激しい欲求がある。

---

先ほどの回答の中で指摘された「過去の自分」とは一体どれほど遡った過去の自分なのか？という疑問が浮かんでいた。それは幼少時代の自分ではなく、比較的最近の自分を示していることがわかった。具体的には、日本を離れ、米国で生活を送っていた時の自分であり、米国から日本へ戻ってきた際の自分であった。

誰しものが一度は必ず考えたことがあるであろう、自己の同一性に関する問題について、仮にその同一性の鎖を切断した場合、私の内側で何が起きるのかに関心がある。結局、このような鎖は切断を望んでも切断することができないのだが、そうした不可能性を理解していても、仮に自己同一性の鎖を切ることができたら、今の自分はどうなるのかに強い関心があった。そしておそらく私は、決して切断されぬそうした鎖を何としてでも断ち切りたいのだと思う。2017/6/7

#### 1146.「リゾーム(地下茎)」と認識の枠組みのベクトル転換

今日は非常に寒い一日だった。「涼しい」というよりも「寒い」という表現が最も妥当な体感温度であった。

先ほど、今日の仮眠中の意識内の現象について振り返った後、それに類似したまた別の現象について考えを巡らせていた。フランスの哲学者ドゥルーズとガタリが提唱した「リゾーム(地下茎)」と呼ばれる概念について考えていた。

先ほどの仮眠中で私が触れていた世界というのは、確かに無意識の世界なのだが、そこは「無」が支配する世界ではなく、むしろ逆に「有」で充満した世界のように思えた。そして、その有を形作っているのが、無数の概念や感覚群、さらには概念や感覚を生み出す原型のようなものであることに気づいた。まさに、それらは無意識の世界の中で、無数の茎のように繁茂している。そして、それらの生成はとどまることを知らず、絶えず新たな茎を生み出している。

そのような世界が自分の無意識の領域に広がっていることを以前からうすうす感じながらも、最近はそのことについて確証的な思いを持っている。そうした思いに至らしめたのは、まさに夢見の意識の中でそうした地下茎に触れる実体験を積んできたことだ。

---

今の私は、この止むことのない無限の生成を絶えず観察しようとし、その生成の足取りをさらに加速させるような試みに従事していることを知った。一人の人間が保有しうる地下茎の絶対量そのものに強い関心があり、それはどのような質的な変容を遂げていくのかにも強い関心がある。こうした地下茎こそが、まさに生成を宿命づけられた私たちの本質に眠っているものであり、それらは生成の産物でありながら、生成をもたらす創造者でもあるのだと思う。

自分の内側に存在する地下茎について少しばかり考えを巡らせたところで、昨日に考えていた、自分の世界認識の枠組みの変化についてその続きを考えていた。

第二弾の書籍『成人発達理論による能力の成長』を執筆する前あたりから、成人発達理論や発達心理学の枠組みは私にとって最も重要なものであるのと同時に、その枠組みを通じた世界認識のあり方を少しずつ緩め、全く異なる世界認識の枠組みを通じて物事を捉えていくことが重要だという思いが強くなっていた。そうした問題意識の萌芽は、オランダに向かう前の日本での滞在中にも見られていたことだ。オランダで何をしようとしていたかという、人間の発達を複雑性科学と応用数学の枠組みを通じて探究していくことであった。

同時に、発達心理学にせよ、応用数学にせよ、発達科学や複雑性科学と形容される科学的な認識の枠組みそのものを検証するような「科学哲学」を探究する動きが自分の内側の中に見られていた。そうしたこともあり、昨日改めて思っていたのは、過去数年間の自分はいかに発達心理学の枠組みのみに依存する形で、何らかの現象や他の領域を眺めていたかということである。

これはもちろん、専門性の確立の段階において通らなければならない道である。ここをいかに徹底して歩み通すかが、確固とした専門性の確立を左右するのは間違いない。つまり、専門性の確立の時期にあたっては、その領域固有の認識の枠組みを用いて世界を眺め、その領域固有の言語体系を用いて現象を説明するという鍛錬を徹底的に積まなければならない。

これを避けていては、専門性の確立など到底不可能であり、それは発達心理学の研究によっても明白だ。当然ながら、これからも私は発達科学に関する専門書や論文と向き合い続けていくが、最近の私の探究姿勢を見ると、発達科学とは全く異なる学問領域の専門書や論文を知らず知らず読んでおり、これはおそらく新たな世界認識方法の確立に向けた動きだろう。

---

言い換えると、これまでの自分にはない新たな専門性の確立に向けた動きであり、同時にこれまでの専門性を、新たに確立しようとする領域の認識の枠組みを通じて検証し直すという試みである。「ああ、ベクトルの向きが変わった」と昨日の夕食中につぶやいていたのは、おそらくそういうことだろう。

これまでは、発達心理学を含めた発達科学の認識の枠組みを通じて他の領域を捉えていたのに対し、今は他の領域の認識の枠組みを通じて発達科学を捉えるという方向転換が起こっている。そうした認識の枠組みのベクトル転換は、一瞬にしてなされた出来事であるがゆえに発達の非連続性を示すものであり、それがこれまでの経験の蓄積によってもたらされたものであるがゆえに発達の連続性を示すものだった。2017/6/7

#### 1147. 作曲実践の進展

昨日と同様に、今日も気温が低い。日本はそろそろ梅雨入りの時期だろうか。フローニンゲンは、先週は日中日差しの強い日もあったが、ここ最近はまだ肌寒い気候に戻っている。昨夜の就寝前に寝室の寒さを感じ、また、起床直後にも室内全体が寒いように感じた。

今日も曇り空が窓の外に広がっている。天気予報によると、若干の小雨が降るようだ。外の天気がどうであれ、私の毎日の過ごし方やあり方は揺らぐことがない。内側の芯が促す仕事を淡々と愚直に継続していただくだけである。昨夜は、一日の全ての仕事を終えた後、作曲の学習と実践を行っていた。

つくづく人間の学習プロセスは興味深く、徐々に音楽言語を理解し始めている自分がいることに気づいた。一切の音楽知識がなかった私が作曲に取り組み始めて日は浅いが、それでも日々の生活の中で作曲の学習と実践に充てる時間を少しずつ確保していけば、このように徐々に音楽言語が自分の内側に構築されていくのだ、ということをも身を持って体験した。

これは振り返って見て気づくことだが、毎日作曲のテキストを少しずつ読み進めていると、この二ヶ月以内に三冊ほどの入門テキストを読み終えることができた。作曲というのは他の実践領域と同じく、教育哲学者のジョン・デューイが提唱するように“learning by doing”の姿勢が非常に大事になる。

---

私はそれらのテキストに書かれた文字を単に目で追っていたのではなく、それが実践的なテキストであるということも手伝って、とにかく自分の手を動かしながら曲を作っていくことを行っていた。まさに経験学習を進めることによって、私は音楽言語を自分の新たな言語体系として内側に構築していくことができたのだと思う。

また、テキストの演習を作曲ソフトを活用しながら取り組むことによって、作曲ソフトの操作も随分と慣れてきた。新たな言語を自分の内側で構築していく喜び、そしてその言語を表現するためのソフトの活用に習熟していく様子は、プログラミング言語のRを学んでいた頃の様子と似ている。Rを学んでいた時も、プログラミングコードを書いていく行為そのものの中に喜びを見出し、少しずつRの言語体系を習得していった。そのおかげで、フローニンゲン大学での研究にも、不自由なくRを活用することができている。

今週末から来週の頭にかけて、“Alfred’s Essentials of Music Theory (2004)”という音楽理論の基礎テキストの中で、最後の課題曲であるベートーヴェンの『エリーゼのために』を解析し、それを作曲ソフトの五線譜上に再現するというを行いたい。これには数日間の時間を要するだろう。それが終われば、いよいよ“Composing Music: A New Approach (1980)”というより実践的なテキストに取り組んでいきたいと思う。

夏の休暇を利用して、このテキストを最低でも一回読み通すことができたなら、作曲に関する知識と技術の基盤が構築されるだろう。このテキストもとにかく実践課題が豊富であり、まさに“learning by doing”の姿勢を持ってこのテキストに取り組みたい。2017/6/8

#### 1148. ヘラクレイトスと自己との闘争

ふと、今年の三月初旬にザルツブルグで行われた学会の初日の夕食会を思い出していた。特に、その夕食会での数人の研究者との会話を思い出していた。私のディナーテーブルには、アメリカ人、ギリシャ人、スペイン人、ポルトガル人、デンマーク人の研究者が座っていた。この学会は複雑性科学に関するものであり、自然と夕食時の会話も複雑性科学に関するものとなった。

向かい側に座っていたギリシャ人の研究者に対して、私はギリシャ哲学に関する質問をあれこれと投げかけていた。その中で、「プラトンには複雑性科学の発想が見られるように思う」ということを私

---

---

が述べると、横からスペイン人の研究者が、「プラトンよりもヘラクレイトスだろう」と笑いながら述べた。そのスペイン人研究者に賛同する形で、そのギリシャ人研究者も、ヘラクレイトスの思想の中に複雑性科学の発想を見出しているようだった。そこでの会話以降、ヘラクレイトスという存在が私の中で気になるものになっていた。

全くもって突飛な考えに思えるかもしれないが、ヘラクレイトスが生まれたエフェソスに行ってみようと思った。私は、てっきりエフェソスはギリシャにあるものだと思い込んでいたが、調べてみると、トルコの最西部に位置することがわかった。どのタイミングでトルコ旅行を実施するかは未定だが、エフェソスには近い将来必ず足を運ぶだろう。ヘラクレイトスが書き残した書籍を調べてみたところ、一冊ほど彼が残した言葉が全集の形でまとめられているものを発見した。

しかし全集とは言っても、それほど分量はない。ヘラクレイトスの思想の中で興味深く思うのは、確かに最も有名な、「万物は絶えず流転している」という考え方にあるが、それ以上に、変化の背後にある変化しないものを見据えていた点が大変興味深い。ヘラクレイトスはそれを「ロゴス」と呼び、ロゴスは火であるとみなした。ロゴスを火と見立て、それを闘争の象徴としたのである。

ここに、複雑性科学の知見が組み込まれた近年の発達理論の考えの核にある発想を見て取ることができる。まさに、私たちの成長は変化と闘争を通じて成し遂げられていく。絶えざる変化に横たわるのは一貫した自己との闘争であり、それは健全な自己批判の形となって現れる。「自己との闘争」と形容できる自己批判は、まさに火を象徴するものであり、燃焼過程の中で変化し続ける私たちを貫いているのは、こうした火を彷彿とさせる自己批判だろう。

また、ヘラクレイトスの思想が複雑性科学の発想と非常に似ている点について、よりわかりやすい箇所は、ヘラクレイトスが変化の背後にある不変的なものを捉えていた点だ。ある現象がどれほど混沌としたものに思えても、そして、それが無秩序なものに思えたとしても、実はそれはある一つの法則性によって生み出されている場合がある。ダイナミックシステム理論を包摂する複雑性科学の言葉では、そうした現象を「決定論的カオス」と呼ぶ。ランダムのように思える現象が、実は極めてシンプルな数式から生み出されていることがあるのだ。

---

ヘラクレイトスにはどこか、決定論的カオスを捉えるような認識力が備わっていたように思える。おそらく、そうした点を考慮して、ディナーテーブルで同席したスペイン人とギリシャ人の研究者は、ヘラクレイトスを複雑性科学の発想を強く持った哲学者だとみなしたのだろう。ヘラクレイトスの全集を購入し、それを携えて、いつかヘラクレイトスの生誕の地であるエフェソスに足を運びたいと思う。2017/6/8

#### 1149. 心理統計学に関する言語体系

小雨の降りしきる中、今朝は「タレントアセスメント」の最終回のクラスが行われるキャンパスに向かった。キャンパスに向かう最中の天候は優れなかったが、私の内側はどことなく意気揚々としたものだった。私は相も変わらず、種々雑多なことを考えながらフローニンゲンの街を歩いていた。その時にもっぱら自分の頭の中を占めていた想念は、来週に発売される第二弾の書籍『成人発達理論による能力の成長』がどれほど多くの人に読んでもらえるかということであり、どのような反応が得られるのだろうか、ということだった。

とにかく今回の書籍では、発達理論の中にある難しい概念をそれほど紹介することなく、いくつかの重要な概念に絞って、それらを具体例やエクササイズを通じて理解を深められるような配慮をした。実際のところ、今回はカート・フィッシャーの理論を中心に紹介をしたが、日本ではまだほとんど知られていない発達科学者として、ポール・ヴァンギアート、サスキア・クネン、アラン・フォーゲル、マーク・レヴィス、エスター・セレンなどがいる。

彼らは複雑性科学の知見を発達科学の研究に適用した非常に重要な人物であり、彼らの研究は、カート・フィッシャーの研究内容と全く同等の意義と魅力を持つものである。またいつか、彼らの研究や理論をもとにした実践書を執筆してみたいとも思う。そのようなことを考えながら歩いていると、目的地に到着した。今日の最終回のクラスでは、フローニンゲンの近郊の町ルーワーデンにあるホテルマネジメントスクールのアドミッション担当者に対して、自分たちの研究成果をもとに、既存の入学審査に対する改善策を提案した。

どのグループの発表も大変興味深く、当然ながら自分たちのグループの分析結果と改善策と類似するものもありながら、自分たちにはない観点から分析を実施し、非常に示唆に富む提言をしてい

---

るグループもあった。私は心理統計学の専門家ではないため、このコースの各回のディスカッションに付いて行くことが時に難しかったが、先週から今週にかけてコースで取り上げた論文を全て読み返したため、ようやく最終回になってクラス内でのディスカッションに不自由がなくなった。

このコースを通じて改めて、自らの専門領域外の言語空間内でディスカッションをするためには、その領域固有の言語体系をある程度構築しておかなければならないことを思い知らされた。特に今回のコースでは、発達心理学の枠組みを通じたアセスメント開発に携わっていた時には聞いたことなかったような概念と遭遇することが多かった。それらの概念の定義を明瞭にし、具体例と共にそれらを自分の言葉で説明できるかは、学習の一つの試金石になるだろう。このコースで取り上げられた論文の中に見慣れない概念が多く登場して当初は、私の言語体系は非常に脆弱だったように思う。

そこから少しずつ、自分の言葉でそれらを説明できるように徐々に鍛錬をしていった結果、能力測定に関する言語体系の基盤が確立されたように思う。能力測定の開発は、今後の私の仕事の核となるものの一つであり、今回のコースで獲得した言語体系をもとに、この領域のさらなる探究に着手したいと思う。アセスメントに関する理論や開発技術のみならず、アセスメントを取り巻く社会的な思考の枠組みや仕組みにまで観点を拡大した探究を行う必要があるだろう。2017/6/8

## 1150. 最終試験へ向けて

今朝は普段以上に長い睡眠時間を取った。それは意図していたことでは決してなく、私の身体と精神がそれを欲していたからであった。

昨日は、「タレントアセスメント」の最終試験へ向けて、もう一度課題論文を全て読み直すという作業を開始した。一つ一つの論文を丁寧にもう一度読み返すという作業は以外と骨の折れるものであり、初読のときに見落としていた箇所や、初読の際には理解できなかった箇所を改めてじっくりと考えながら読むということを行っていた。

昨日の午後から就寝前にかけてそのようなことをずっと行っていたにもかかわらず、自分が計画していたほどの論文を読み返すことができなかった。そうしたこともあり、就寝前の私は、少しばかり焦りのような気持ちを持っていたのは確かだ。計画通りに進まなかったという速度の問題と、それよりも



---

深刻なのは、それらの論文の内容に対する理解の問題があった。心理統計学の基礎的な概念やアセスメントに関する論点に習熟してきたとはいえ、どこことなくそれらの理解の浅さを実感している。

そもそも、論文を読み返す速度と内容理解についてそれほどまでに問題視しているのは、「タレントアセスメント」の最終試験で出題される自由記述形式の問題が一筋縄ではいかないと理解しているからだろう。最初の修士号を取得した米国の大学院に比べて、フローニンゲン大学の修士課程における成績評価は非常に厳しい。友人のインドネシア人の留学生が、あるコースの試験に不合格となり、追試にも落ちたという話を聞いた。

彼女はこの夏に単位を補完するコースを受講しなければならないそうだ。今回私が受講している「タレントアセスメント」や「成人発達とキャリアディベロップメント」のコースにおける最終試験も通過の難易度はほとんど変わらないだろう。それぐらいに、研究大学院であるフローニンゲン大学のコースの試験に通過するのは難しい。仮に自分が米国の大学院に留学することなく、フローニンゲン大学に先に留学することになっていたのであれば、単位を取得できていたかどうかは怪しい。

今日は早朝から論文を読み返すことを行い、本日中に少なくとも七本の論文の理解を深めたいと思う。2017/6/9

### 1151. 発達測定に関するメモ

今日は早朝から午後にかけて雨が降り続いていた。時折激しい雨が降り、時に小雨が降るといような天気であった。夕方からはすっかり晴れ間が広がり、雨と晴れの落差の激しい一日だった。そうした天候の落差の最中、私は一日中ずっと論文を読み続けた。「タレントアセスメント」の最終試験が来週の木曜日に迫っており、それに向けて本コースで取り上げられていた論文を丹念に読み返していた。

午前中、最初の論文をあまりに丹念に読み過ぎており、自分が枝葉末節の論点に陥っていることに気づく瞬間があった。その時を迎えるまで、あまりにも再読の進展が進んでいないため、気が滅入りそうになった。少しばかり読み方を工夫し、昼食前からなんとか精神状態が回復した。昼食を摂ってすぐに再び書斎に戻り、論文の続きを読み始めた。

---

そこから夜の八時半までひたすら論文を読み続ける時間が続いた。なんとか計画通りの数の論文を読み通すことができ、今は少しばかり安堵している。今日はある意味、コースで課せられている論文を読むという、外発的な動機が内発的な動機を幾分上回る形で論文と向き合っていたため、仮にこれが純粋な内発動機に基づいたものであれば、私の精神状態も異なったものになっていたであろう。

外発的な刺激を内発動機を誘引するものに変換するという事は、私はまだ不得手であるようだ。今の私の中核的な学習観は、自らの内発的な動機のみに基づいて探究を行っていくべきだというものだが、ある大学機関に所属する形で学術探究を行っていく場合には、往々にして外発的な動機による探究を行わざるを得ない場合がある。そうした際に、それらの外発的な動機を変容させ、それらが完全に内発的な動機の中に溶け込むような手段と発想を考えたい。

今日は時間をかけて合計で七本ほどの論文と向き合っていた。その中で改めて、発達測定をハイスティクスな文脈 (high-stakes contexts) で活用することの是非について考えていた。ハイスティクスな文脈というのは、その測定が昇進や採用など、アセスメントがその人の人生にもたらす影響が大きい状況のことを指す。逆に、ロースティクスな文脈 (low-stakes contexts) というのは、その測定がその人の人生に左右する影響が少ないものを指し、例えば研修で用いる性格診断などはロースティクスな測定の例である。

私がマサチューセッツ州のレクティカに在籍していた時、ここはFBIやCIAなどの組織をクライアントに持っていた。レクティカは、カート・フィッシャーのダイナミックスキル理論に基づいた発達測定を組織人の能力測定に活用していることで有名である。

レクティカが最も気をつけていたことは、発達測定を単に人材の採用や昇進に活用しないようにクライアントに警告することであった。レクティカが発達測定に対して持っていた考え方は、人材の採用や昇進のために能力測定を行うのではなく、あくまでも成長支援につなげるために、さらなる学習を促すために能力測定を行うというものだった。つまり、発達測定をハイスティクスな文脈で用いるのではなく、発達測定を起点として、さらなる成長につながる学習支援を行うことを何より重要なことだとみなしていたのだ。このあたりの論点については書き留めておきたいことが無数にあるため、折を見てそれらを書き記しておきたいと思う。2017/6/9

---

1152. 『成人発達理論による能力の成長』の主題の断片:既存の経済原理に立脚した種々の未成熟な発想からの脱却

昨日は多くの時間を論文を読むことに充てていたため、文章を書く時間がほとんどなかった。そのような日は決まって、就寝前に表現を待つものたちが騒ぎ出す。昨夜も実際に、その日に自分の内側から外側に表現すべきであった思考や感覚が暴れ出し始めた。速やかに入眠することができず、私はベッドの上で独り言をいくらかつぶやいたり、表現すべきであったものたちの騒ぎに頭の中で付き合っていた。

就寝前に自分を捉えた論点は複数にわたっているが、その中でも一つ、第二弾の書籍『成人発達理論による能力の成長』の内容と関係するものと向き合うことに多くの時間を使っていた。これはおそらく、本書の第二章と第三章の主題に関するものである。

先日、日本に在住の日本人の方とオンラインで話をする機会があり、その方の話によると、日本では「生産性」という言葉が注目を浴び、生産性の向上を目指す動きが高まっているそうだ。私が本書を通じて訴えようとしていたのは、そうした生産性の拡大や向上とは真逆の発想の大切さである。言い換えると、間違っても人間の成長というものを、生産性の向上の名の下に推し進めてはならないということを指摘したかったのである。より正確には、私たちの成長を既存の経済原理の枠組みで捉えては決してならないのだということを主張しようとしていた。

なぜなら、人間の成長に横たわる本質と既存の経済原理の発想は相容れないものだからだ。人間の成長速度は極めて遅く、緩やかな成長というのが自然な姿である。一方、既存の経済原理の発想は、いかに早く効率的に大量なものを生み出していかという点に根ざしている。仮にそうした発想を私たちの成長に適用してしまうと、それは悲惨な結果を招いてしまうことになるだろう。

既存の経済原理の発想、特に最近広まりつつある「生産性の向上」という発想によって人間の成長を捉えようとするとき、私たちはさらなる成長を遂げられないばかりか、歪な成長が実現されてしまうだろう。そして、往々にして、既存の経済原理の下で語られる「成長」というのは、量的な拡大であり、質的なものを蔑ろにすることはまた別の大きな問題である。

---

ここで私は何も、「生産性の向上」という言葉そのものの悪性を指摘しているわけではない。そうした言葉が既存の経済原理の枠組みに立脚する形で発せられていることが問題なのだ。どうして私たちはそれに気づかないのだろうか。そのようなことばかりを昨夜の就寝前に考えていた。

生産性の向上という言葉と合わせて、「自己実現」という言葉も依然として力を持った言葉だろう。この言葉に関しても、確かにアブラハム・マズローが指摘するように、私たち人間には自己実現欲求なるものが備わっているため、自己実現を希求するということは至って自然である。しかし、極めて不自然に思えるのは、本来、自己を呪縛する社会的な思想や仕組みを超えたところでなされるはずの自己実現が、既存の社会的な思想や仕組み、特に既存の経済原理の枠組みの中で捉えられていることである。

私たちは、既存の経済原理の枠組みを通じて自己実現や自己の成長を捉えてはならないのだ。結局そこでの自己実現や成長というものは、単なる量の追求であり、速さの追求である。

既存の経済原理の枠組みに立脚した「生産性の向上」や「自己実現」という言葉を通じて人間の成長を捉えようとする未成熟な発想から脱却しなければならない。私たちはいつになったら目覚めるのだろうか。2017/6/10

### 1153. リフレクションの本質:「無間地獄に続く道」

昨夜の夢の印象が、私の内側にまだ留まっている。昨日はとても寒い一日であり、それと足並みを揃えるかのように、昨夜の夢の中では、大量の雪が辺りに積もっている場面に遭遇した。

とても深い雪が街中を覆い、交通の動きが大変鈍かった。そのような中、外出をしていた私が自宅に戻ってドアを開けようとする、積もった雪に阻まれて、ドアを速やかに開けることができなかった。フローニンゲンで知り合ったドイツ人の友人が車庫から私の自宅に入り、内側から表のドアを開けてくれた。どんよりとした灰色の空の下、深い深い雪の降りしきる夢だった・・・。

夢から覚めると、真っ赤な朝日が空に昇っている様子が寝室から見えた。昨日とは打って変わり、今日は一日中晴れようだ。現在の気温は少し低いが、昼食前にランニングに出かけることになるだろう。昨夜の就寝前にあれこれと考えていたことが、まだ自分の内側に未消化なまま残っている

---

感覚がする。それらを文章の形にしておきたいと思う。その論点は、昨日の日記でも取り上げていた「リフレクション」についてである。

昨夜の私はやはり極端な思考を持っており、「リフレクションを実践する際には、二つの選択肢のどちらか一方を選ぶしかない」ということをつぶやいていた。一方は「無間地獄に続く道」であり、もう一方は「感想会に興じる道」である。世間一般で行なわれているリフレクションは、感想会に興じる道の上で行なわれていることであり、本質的なリフレクションは無間地獄の道の上でなされるものである。そのようなことを強く思っている自分がいた。

そもそも「リフレクション」というものが、単なる感想を述べることではないことは第二弾の書籍の中で言及している。昨夜の私は、書籍の中の説明とは異なる形で既存のリフレクションとより本質的なリフレクションを捉えているようだった。世間一般で行なわれているリフレクションは、私たち各人が持つ意味構築装置から生み出された表層的な現象を捉えることに終始している。そうした表層的な現象に意識を当て、気づきや発見を得ようとする様子は、感想会における単なる思いの吐露にしか私には見えない。

己の意味構築装置から生み出された表層的な現象に焦点を当てる行為は、ピアジェが提唱した「内省的抽象化(reflective abstraction)」というリフレクションの本質を骨抜きにしている。内省的抽象化というのは、内省を通じて自分の思考そのものを検証することを指す。ここでの文脈で言えば、意味構築装置から生み出された表層的な現象に思考を当てるのではなく、意味構築装置そのものに思考を与えることだ。まさに、リフレクションの本質は、私たちが持っている既存の発想の枠組みそのものを検証することであり、意味構築装置そのものの質を検証することなのだ。

ピアジェが提唱した内省的抽象化という言葉を用いれば、リフレクションの本質をそのように捉えることができるだろう。そのような考えに至った私は、少しばかり苛立ちの感情を持っていた。「そのようなリフレクションも話にならない」という一言が私の口から漏れた。リフレクションにはさらに深い本質があるに違いない、という思いが私を離さなかった。

意味構築装置そのものを検証することは、リフレクションの道半ばであり、それは本質ではないことに気づかされた。リフレクションの本質は、意味構築装置そのものが立脚している基盤を検証するこ

---

となのだ、という確信めいた考えが浮かんだ。つまり、リフレクションの本質は、個人の意味構築装置そのものを呪縛している集合的な発想の枠組みを検証することにあるということだ。私たちはリフレクションを通じて、意味構築装置が生み出す表層的な現象に囚われるのではなく、そうした現象を生み出す私たちの発想の枠組みそのものを検証し、そこからさらに、私たちの発想の枠組みそのものを呪縛する集合的な発想の枠組みそのものを検証していかなければならない。

ここで私は再度、昨夜の自分がなぜリフレクションを「無間地獄を歩む道」だと認識していたのかを思い出していた。その時に浮かんでいたのは、リフレクションという言葉が想起される「鏡」のイメージだった。上記の説明をもとにすれば、世間一般で行なわれているリフレクションは、鏡に映る自分の姿しか捉えようとしないと言える。そこでは、鏡そのものを疑うという姿勢が皆無なのだ。そうであるがゆえに、鏡に映る自分に対する単なる感想しか述べるできないというのが、世間一般のリフレクションの姿だろう。

しかし、少なくとも私たちが行わなければならないのは、その鏡そのものを検証することなのだ。実際には、自分の拳で鏡にひびを入れていく行為がリフレクションの本質を突いている。真のリフレクションが既存の発想の枠組みからの脱却を実現させるものであるならば、私たちは既存の鏡を打ち砕く必要があるのだ。

既存の鏡を打ち砕いた瞬間に、さらに新たな鏡が私たちの眼の前に立ち現れる。その鏡に対してもまた、内省という自らの拳を用いてひびを入れていかなければならない。既存の鏡を打ち砕き、さらに新たな鏡に対しても同様のことを行わなければならないという人間の姿、すなわち、自らの拳に血を流しながら、永遠と自己の内側の鏡を壊し続けなければ成熟などなしえない人間の姿が、昨夜の私には「無間地獄」のように思えた。

そこから一夜が明けたが、私の内側にはやはり、このまま「感想会に興じる道」を歩むのか、「無間地獄に続く道」を歩むのか、腹を括って決断しなければならないという思いがある。2017/6/10

#### 1154. 終末の日

昨夜の、激しく外側に形になろうとする思考や感覚について、また少し考えていた。というよりも、それについて立ち止まって考えなければ、一切の仕事が手につかないのであるから、立ち止まって

---

考えざるをえなかった。昨夜、内側で暴れ出すような思考や感覚を鎮めるために居ても立っても居られなくなった私は、それらをノートにメモしておいた。そのメモを見返すと、一つ重要な事柄が記されていた。それは、意識の発達を手放しに推奨する安直な発想に対する警鐘と関係しており、終末の日に関するものだった。

これは今年のちょうど今頃に日記に書き留めていたことだと思うが、「意識の発達がこの世界の問題を解決する」などという安易な発想を持つてはならない。結論から述べると、それは幻想である。

今年の私はこうした幻想的な考え方を説明する際に、「涅槃的誤謬 (nirvana fallacy)」という概念を用いていたように思う。涅槃的誤謬とは、非現実的なものや空想的なものを現実的なものと取り違え、非現実的・空想的な手段を持ってして、現実の課題に対処しようとする認識上の誤りのことを指す。

実際に現実の課題に向き合おうとしているのであればまだ救いはあるが、「意識の発達がこの世界の問題を解決する」という主張を述べる者の多くは、現実の課題に向き合おうとする発想そのものが希薄である。実際には、私たちを取り巻く外的世界の問題は、意識の発達が実現されたところで解決されるような甘いものではない。それよりもむしろ、意識の高度化は必然的により高度な課題を私たちに突きつけるということを忘れてはならない。仮に集合的な規模での意識の発達が既存の問題を解決することがあったとしても、私たちは、既存の問題以上に複雑で深刻な問題と向き合うことを宿命付けられている、ということ忘れてはならないだろう。

昨夜、そこからさらに考えていたのは、終末の日についてであった。何度も何度も思考実験を繰り返してみても、地球が崩壊し、人類が滅亡するシナリオは無数に生まれてくるのに対し、地球と人類が存続し続けるというシナリオを考えることは絶望的なまでに難しかった。

私たち個人、組織、社会は、複雑な要素が相互に影響を与え合ったダイナミックシステムである。ダイナミックシステムは、それが質的な成長を遂げることには時間がかかるが、システム全体が機能不全に陥るのは一瞬だという特徴がある。そして、システムの複雑性が増せば増す分、崩壊時の被害が絶望的なものになっていく。それはここ最近の歴史を振り返ってみても明らかだろう。

---

例えば、金融市場の複雑性が増し、そこでの一つの歪みが結果として全世界的な経済不況を起こしたことは記憶に新しいだろう。私たち個人、組織、社会というダイナミックシステムは、成長に伴ってその複雑性が増せば増すだけ、このようにたったひとつのボタンの掛け違いによって、悲劇的な状況をもたらすのだ。

ここからさらに、私たち個人、組織、社会が成長していくことによって複雑性が増すことは、非常におぞましい惨事をもたらしかねない道を歩んでいると思えて仕方がない。個人も組織も社会も、成長の道を一步一步進んで行くことが宿命づけられているのであれば、少なくとも、成長に伴う危機の増大について理解をしておかなければならない。ダイナミックシステムの成長は時間のかかるものでありながら、その崩壊は本当に一瞬なのだから……。2017/6/10

### 1155. オランダの大学院と米国の大学院

今日は午前中のうちに、計画していた通りの数の論文を読み終えた。「タレントアセスメント」のコースの最終試験に向けて、午前中のうちに、パーソナリティアセスメントを含めた、非認知的能力のアセスメントに関する論文を六本ほど読み終えることができた。

たいていの場合、論文を音読し、音読によってすぐに理解ができない箇所や、音読によって体感的にそれが重要な文章だとわかった箇所には、黙読を用いて丁寧に読み解くか、音読を何度も重ねるようなことをしていた。こうした作業を午前中の間ずっと行っていた。全ての論文に目を通し終えるあたりに差し掛かると、自分が短期間のうちにタレントアセスメントに関する知識体系の基盤を確立していることに気づいた。

今回のコースで取り上げられている項目の多くは、これまで私が積んできた発達測定の実験内容とは随分と異なっていた。そうした意味において、私はある意味、小さな言語体系をまた一つ新しく確立することが求められていたと言える。それも短期間のうちに。

米国の大学院に留学していた際、そこでも四学期制が採用されており、各学期の中で、比較的短い時間のうちにコースで取り上げられる言語体系を自分のものにしていくことが求められていた。しかし、当時を振り返ってみると、それはそれほど過酷なものではなく、基本的には自らの関心事項を中心に据え、その周りを補完していくような探究姿勢が通用していたように思う。

---



---

それを如実に示すのが、米国の大学院の各コースで課せられていたペーパーの類である。これらは基本的に、コースの内容に沿う形であれば、比較的自由に自らの関心に沿って文章を執筆していくことができる。他の学科を含めて一般化することはできないが、心理学に関しては、米国の大学院ではそのような形が採用されていたように思う。つまり、学生の関心事項を中核に据え、ペーパーの執筆を要求することによって、学生自らが自分の関心事項から同心円状に専門領域の言語体系を構築していけるような教育が提供されていたように思う。

一方、オランダにおいては事情が少しばかり異なる。心理学に限ってみると、米国式のペーパーを書かせる形で、学生の関心事項から同心円状に彼らの専門性を涵養していくというよりも、ペーパーを課すことはそれほど多くなく、自由記述式の試験を課すことによって、その道の専門家である教授が不可欠だとみならず知識項目を過不足なく習得することが要求されている、という印象を持つ。

特に、私が所属するフローニンゲン大学の心理学科ではそのような教育が施されている。そうした教育ゆえに、私は、自らが確立してきた既存の専門性から同心円状に専門領域を拡大するというよりも、全く異なる専門性の円を、これまでの専門性の領域の枠外に築いていくことを余儀なくされていた。

どちらの教育方法にも一長一短があることは確かである。いずれにせよ、今の私はそのような形で自己の専門性を涵養していく状況に置かれているのは確かだ。今回のコースにおいても、過去に私が築いてきた専門性の外に出て、そこで新しい言語体系を打ち立てていくことが求められていた。とりわけ、現在の所属大学が四学期制を採用しているがゆえに、二、三ヶ月という短い間に、履修するコースで要求される新しい言語を学んでいくような感覚だ。

昨夜も就寝前に、フローニンゲン大学の成績評価について考えていたのだが、そこでは、二、三ヶ月という短い間に、カート・フィッシャーのレベル表記で言えば、その新たな言語体系を最低でもレベル10で習得しなければ、単位が取れないような仕組みになっている。

たいていの場合、レベル0から出発し、速やかにレベル9の能力をコースで取り上げられる全内容について発揮できるようにしなければならず、最終試験においては、少なくともレベル10の能力レベルに達していなければ、単位の取得が危ぶまれるという仕組みになっている。これは学習に充てる

---

このできる時間の量を考慮に入れると、難題であることがすぐにわかる。そのようなことを昨夜考えていた。

結局、そうした状況を客観的に眺めてみたところで、履修コースの専門性が向上するわけではないので、再び論文を読み、それを書くことを通じて理解を深めていくという具体的な実践に従事したい。夜から就寝前の一時間前まで、また論文を読む。2017/6/10

### 1156. 植物の根のように

私は自らに、後八年ほどの徹底的な修練期間を課そうと思う。その修練期間を終える頃までには、なんとか自分の仕事を世の中に形として少しずつ残せるようになりたいと願う。その期間においては、周囲からの雑音に耳を傾けることなく、絶えず進むべき方向に向かって歩き続けなければならない。最近徐々に気づき始めているが、こうした姿勢は一生涯にわたって継続させていくべきものであるのと同時に、その性質は変化してしかるべきものだと思っている。

端的に言えば、今後は、今と全く同じような形で探究を進めていくことはできないということである。自らの内面的成熟過程に応じた探究の形が必ず存在しており、それは人生の外的な諸々の現象を通じて絶えず変化していくものである。

「成人発達とキャリアディベロップメント」というコースの中で、老年期のキャリアに差し掛かった時、多くの人々は“generativity needs”を持つということを改めて学んだ。これは特に目新しい概念ではないが、それは、後進の育成への目覚めや次世代に何かを伝承していこうとする欲求である。なぜだか、私はこの概念が気にかかっていた。私もいつかそうした欲求を持ちながら探究活動に営む日が来るのだと思う。

そうした予感が、現実味を帯びる形で私の内側に存在していた。まずはここからの八年間をいかように過ごすかが、自分に課せられた一つの大きなテーマであるように思えた。

私たちの腹は、括ろうと思って括れるようなものではない。私は、腹を括ってこれからの八年を歩んでいこうと思う前に、すでに腹が括られていたことを知った。これが腹を括るといふ真意なのだろう。

---

今日は昼食前に、ノーダープラントソン公園へランニングに出かけた。公園内に茂る青々とした木々や芝生の生命力に感化されるものがあった。そうした木々や芝生を見ていると、私の内側にある生命力そのものが、地底から湧き上がってくるかのような感覚があった。植物を眺めるとき、不思議と自分との共通点を考えてしまう。実際には、目の前の植物のようになりたいと思うことが度々ある。特に、誰の目にも触れぬところで、地底に根を張り巡らせ続けるその姿勢に最も大きな共感の念を持つ。私もそうありたい。

私にとって、日々の思考や感覚の一つ一つが自分の根に他ならず、それを人知れず育てていくことが何よりも大切だと思っている。その先に、一人の人間がたどり着く固有の思想体系のようなものが形作られていくように思えて仕方ない。逆に言えば、日々の生活に根ざした思考や感覚を蔑ろにしているのは、根のない脆弱な似非思想体系が姿を現わすことになってしまうだろう。とにかく、日々の生活を通じて、自分の内側に根を張り巡らせるような試みに絶えず従事したい。2017/6/10

#### 1157. 爽快かつ鈍重な朝

心地の良い音楽のような小鳥の鳴き声が、吹き抜けるそよ風に乗せられて自分に届いていく。爽やかさの原型とも言えるような爽やかな早朝。こうした爽快な朝がやって来ながらも、私の身体は少しばかり重かった。連日、大量の論文を読んでは文章にまとめるということだけを繰り返し行ってきたためだろうか。

昨夜はいつも通りの十時に就寝し、今朝は六時に目覚めた。目覚めた瞬間に、自分の脳がより多くの睡眠を欲しているように思えたため、さらにもう一時間ほど睡眠を取ることにした。特にここ数日間、普段以上に論文を読むことを自らに課していたため、どうやら脳が情報の咀嚼に追いついていないようだった。一年目のプログラムがあと一週間で終わりを告げるが、最後の最後まで自らを鍛錬し続けるような形で終わりを迎えることになるだろう。

大量の情報によって脳が飽和しそうな状況の最中、これは私にとって望ましい状態であるように思えた。脳が情報を咀嚼するための時間を必要としている一方で、自分の内側に確かに新たな知識体系が確立されつつあるのを実感しているからである。

---

連日連夜読み続けていたのは、心理統計学と能力測定に関する論文である。それらの論文で展開される固有の言語体系にも随分と親しくなり、それらの言語体系を自分自身で活用できるようになっていることに気づく。絶えず読みながら絶えず書くということを自らに課すことによって、新たな知識体系が自分の内側に構築されていく様子を見れば見るほどに、読むということと書くということにさらに深くのめり込んでいく。そのような循環が自分の内側に生まれている。

読むことに関しては、これまで以上に音読を心がけている。単純に声を出しながら文章を読んでくという音読ではなく、自分自身を教師と生徒の双方に見立て、教師役の私は生徒役の私に質問や説明を行い、生徒役の私は教師役の私に回答とさらなる質問を投げかけるというようなやり取りを音読の最中に行っている。

昨夜、偶然にも、音読に関係する夢を見た。夢の中で私は、ある日本人が英語の文章を音読する姿を観察していた。その男性の英語は米国英語であり、発音は極めて明瞭だった。文章の内容は、植物の生育に関するものであり、その男性の音読を聞いていると、聴覚から文章の内容を鮮明に想起することができた。

文章を音を通じて聞くことには、目で文書を追いかけるのとは違った感覚が引き起こされ、情報が内側に入っていく感覚そのものにも違いがあった。昨夜の夢のその他の内容は全て記憶からこぼれ落ちているが、この場面だけ強く印象に残っている。

早朝に身体の重さがあるときは、朝一番の仕事を少しばかりゆったりとしたものにする、十時あたりから嘘のように身体の重さが払拭される。これは身体に重さが残っているというよりも、脳に鈍重さを感じると言った方が正確だろう。脳からこうした重さが自然に取り除かれるまで、ゆったりと仕事を進めたい。自分の脳には申し訳ないが、今日も大量の論文を読み、大量に文章を書くことをやめはしない。自分の精神がそれを遂行することを強く望んでいるからだ。2017/6/11

### 1158. 自己意識の存在しない世界の中で

書斎の窓から外を見ると、実に平穏な世界が広がっているのが見えた。ほのかな太陽光が辺りに降り注ぎ、動植物たちが各々のなすべきことに従事している姿が見える。目の前の通りを歩く通行人は少なく、車もほとんど走っていない。少しばかり日記を書く手を止めて、窓の外に広がる景色をぼ

---

---

んやりと眺めていた。その間、街路樹の木々を揺らす柔らかな風の音さえ聞こえてくるような静けさが、そこに漂っていた。そうした静けさに彩りを加えているのが、様々な種類の小鳥たちの鳴き声であった。しばらく自然の景色と音色に浸っていると、一台のバイクが通りを走り去った。特にそれを不快と思ったわけではないが、それを合図に、私は再び書斎の机に向かった。

早朝から抱えていた脳の鈍重さが消えない。だが、早朝の時と比べてそれは軽くなり、むしろそうした感覚によって、私は黙想的な意識を維持できているかのようであった。自分の内側に静かに深く入り込んでいく意識の中で、私は昨日の出来事について思い返していた。昨日も再び「あの体験」に見舞われた。

この体験は大げさなものではなく、稀な現象でもなくなってきたことは、以前の日記に書き留めていたように思う。それは、私自身の存在がこの世界から消えてしまうように知覚される体験である。この体験に見舞われる時は大抵、いつもと変わらぬ仕事や作業に従事している。ある意味、この体験は、日常の中に潜む非日常的体験と言ってもいいかもしれない。

昨日は、書斎の本棚から一冊の本を手にとって、それを開こうとした瞬間にそれが起こった。確かに私はその書斎にいて、本棚の目の前にいたのだが、それが起こった瞬間に、自分が一気にどこか別の世界、無の世界のような場所に飛ばされる感覚があった。その世界の中では、「自己意識」なるものは存在しない。存在するのは、何も存在しない世界のみである。

もちろんこの体験は刹那的なものであり、数分間も持続するようなものではない。何も存在しない世界から本棚の目の前に戻ってきた私は、「んっ？」という言葉とともに、その体験が確かに自分に起こったことを知った。自分でも謎に思うが、この体験をした後には決まって、「んっ？」という呪文のような言葉が漏れる。これは非常に名前の付けがたい体験である。

その体験について、先ほど朝食を摂りながら考えていた。私たちが気を失う時、あるいは夢を見ない深い夢の中にいる時、自己認識なるものは存在していないだろう。それゆえ、この体験を最もわかりやすく言えば、「覚醒状態のまま気絶した世界に入る」あるいは「覚醒状態のまま夢を見ない深い夢の世界に入る体験」だと言えるだろう。確か、ドイツの文学作家であるミヒャエル・エンデか、もし

---

くはその父のエドガー・エンデが述べていたように、夢を見ない深い夢の世界が死への準備であるならば、この体験も死への準備であるように思えてきた。

だが、この体験は、夢を見ない深い夢の中で死に向けて準備をすることとは大きく違う点を内包している。それは、この体験が、覚醒状態の中で死への準備をすることにある点だ。そのようなことを考えていると、この体験は、覚醒状態における擬似的な死の体験のように思えてきた。

脳の鈍重さを考慮して、今日はまだ論文を読み始めていない。その代わりに、文章を書くことを選んだ。文章をゆっくりと書き留めることによって、徐々に脳の鈍重さが消えていくのがわかる。それでいて、依然として私の意識は黙想的・観想的なままである。この文章を書き始めた頃よりも、辺りに降り注ぐ太陽の色がより鮮明さを帯び始めた。

私はここから再び、自己意識の極致に向かう道と自己意識すら存在しない世界に向かう道の双方を歩いていこうと思う。2017/6/11

#### 1159. 80年続く内側の中心主題

午前中に計画していた論文を全て読み終えた私は、近所のスーパーに四日分の食料を購入しに自宅を出た。部屋のドアを開けてみると、夏を彷彿とされる熱気に包まれた。その熱気は、螺旋階段の下から上に向けて上昇するような渦を持っているように思えた。自宅の中はあれほど涼しかったのに、部屋の外は初夏を思わせる暑さが漂っていた。

早朝に抱えていた脳の鈍重さはほぼ回復していたが、相変わらず自分の内側には黙想的な意識状態が続いている。全てを見ることなしに見ているような意識の状態を抱えながら、私はスーパーに向かって歩いていた。スーパーに到着する前に渡らなければならない橋に差し掛かった時、私はある一つのこと気づいた。

それはとても当たり前のことなのだが、今の私が追いかけている個別具体的な探究事項を人生の最後の日まで追いかけることはない、ということである。言い換えると、今の私が探究心を持っている個別具体的な事項を、人生の残りの80年間をかけて今と同じようなやり方で探究しているとは到底

---

思えないのだ。実際に、これまでの数年間を振り返ってみただけでも、私の個別具体的な関心事項は変化しており、探究姿勢や探究方法もまた変化している。

そのようなことを考えた時、今の関心事項とそれとの向き合い方が変化することを前提として、日々の探究活動を継続させていくことが賢明なのではないかと思った。つまり、それらは内面の成熟過程に応じて絶えず変化するものだということを念頭に置きながら、今この瞬間においてそれらと真摯に向き合おうとする態度が重要なのではないかということだ。別の見方をすれば、それは、自らの関心事項とそれらとの向き合い方に対して距離を取ることであり、その距離がまた対象の奥深くへと自分を導いていくことを可能にするようなあり方だと見えることができるだろう。

「人生を終える80年後の今頃は、私は何をどのような姿勢で探究しているのだろうか」という素朴な疑問が、橋の上の私に投げかけられていた。スーパーで必要なものを購入した私は、自宅への帰り道、再度この橋の上に差し掛かった。その時私は、先ほどの自分はもはやそこにはいないということを実感した。

絶えず変化を宿命づけられた存在。それが人間なのだということに、私は橋の上で気づかされていた。行き道で橋を渡った時の自分と帰り道でのそれを比べた時、すでに先ほどのテーマについてさらに異なる考えを持っている自分があることに気づいた。確かに、80年後の自分は、現在向き合っているような個別具体的なテーマを今と同じような方法で向き合っているとは到底思えない。

それは正しいだろう。しかし、一つだけ先ほどの視点に欠けている重大なことがあった。それは、私の人生を貫く主題そのものに変化はないだろうということだった。過去の探究者を振り返ってみたときに、ドストエフスキーやトルストイのような偉大な作家は、膨大な作品を残しながらも、それはごく限られた探究主題によって生み出されたことを知る。

また、昨日何かのきっかけでふと作品を読みたくなった小説家の福永武彦氏は、「愛」と「死」を根幹テーマに据えて、数多くの作品を執筆していった。敬愛する森有正先生の場合、それは「経験」と「感覚」だろうし、辻邦生先生の場合、それは「美」だと言えるだろう。そのようなことを考えた時、私の中で「発達」「意味」「言葉」を中心とし、それらと密接に関わった「教育」というものが、今後一生涯にわたって自分を捉えて離さないテーマだと思った。

---

これらの主題は、今後一生私の内側にあり続け、私はそれらと寸分も離れぬ形で、千変万化する個別具体的なテーマを探究していくのだということを知った。それらのテーマこそ、私の精神の中心課題であり、それらから離れる形で生きることはもはや私にはできない。自分の全てのものを自らの中心テーマに捧げ、それらのテーマから自分の全てのものが湧き出てくるようにしなければならない。季節が夏へ向かっていることを感じながら、自分の内側の新たな夏が近づいていることを感じる。

2017/6/11

### 1160. これから生まれる自分と仕事の社会性

自分が70歳を迎えた時に、この世界においてたくさんの新生児が生まれてくる、という当たり前のことに思いを馳せた。仮に、今の自分が想定している寿命まで仕事を継続させることができるのであれば、その時の自分から逆算すると、私はまだ生まれてもいないことに気づく。

「そうなのだ、私はまだ自分の仕事をするということに関して生まれていないも同然なのだ」という気づきを改めて得た。昨日の日記で書き留めていたように、後八年間ほどの準備期間を自分に与えようとしていたのはまさに、この気づきと密接に関係していたのである。

人生を終えるその日まで自らの仕事を継続させていくための、極めて重要な準備期間が今からの八年間なのだ。学びや探究というものが、一生涯にわたって行われるべきものであることは否定のしようがない。そうした意味において、八年後から人生の最後の日に向かって、学びと探究の日が続くことは明らかである。しかし、今からの八年間は、そこでの学びと探究の質を決定づけるような基盤を形成する時期なのだと思う。

この基盤を形成することなく、来るべき日からの仕事を行っても意味はない。とにかく、修練に修練を重ね、準備に準備を重ねるような冬の時代を、少なくとも後八年間ほど継続させたい。自分の中で仕事や探究が真の意味で開始されるのは、その期間が過ぎてからである。それを迎えるまでに自分が成し遂げたことや成し遂げようとしていることは、常に徹底的に否定されなければならない。

こうした否定こそが、さらなる修練と準備に私を駆り立て、その日に向かって着実に歩みを進めることを可能にしてくれる。そのようなことを昼食後に考えていた。この考えは、自らの仕事を持つ社会性について考えていた昨日のテーマとも重なるように思える。



---

昨日は、芸術家、科学者、哲学者などの仕事を持つ社会性について考えを巡らせていたのだが、その時には何も文章を書き留めることをしなかった。得てして、彼らの仕事が真の意味で社会性を帯びるのは難しい。間違っても、彼らが具体的な社会運動に参画することが、彼らの仕事の社会性だと混同してはならないだろう。

芸術家、科学者、哲学者などの仕事が真の意味で社会性を帯びるというのは、彼らを捉えて離さない究極的な問いを探究する過程で滲み出てくるものなのだと思う。一見すると極めて個人的なものに思える主題を愚直に探究していく中で生み出された一つ一つの仕事の中に、真の社会性が宿るような気がしてならない。

そうしたことを考えると、真の意味で自分の仕事に社会性が帯びるためには、今の私を捉えて離さない中心主題を探究し続けることが何よりも重要なのではないかと思った。個人の仕事に社会性が帯びるということの意味については、より深く考えていかなければならないだろう。なぜなら、そこに自分が仕事に取り組む究極的な意味が潜んでいるように思えるからである。2017/6/11